

アイヌ表象と他者性の問題をめぐって:1950年代のテレビドキュメンタリー『コタンの人たち』を中心に

ユメンタリー『コタンの人たち』を中心に

Tourism and Identity: Ethnic Representations of The Ainu and Otherness of Television Documentaries in 1950's

崔銀姫¹

Eunheui CHOI

¹ 佛教大学社会学部現代社会学科 Bukkyo University Department of Sociology

要旨 本研究は、日本でテレビ放送が始まった1950年代から現在にいたるまでの約60年間の、アイヌを素材としたテレビドキュメンタリー放送の歴史を概観しつつ、アイヌ表象の文化的言説の特徴と変容を考察する目的で行われている「テレビドキュメンタリーにおけるアイヌ表象と他者性の問題にかかわる考察～戦後60年間の軌跡と変容～」の一部である。アイヌと和人と認識的距離において、結果的に大きな転換をもたらした政治的な出来事から考えると、戦後のテレビのなかでイメージされたアイヌの表象は概ね四つの時期に区分が可能である。それは、①「観光」とアイヌ：1950年代北海道観光ブームのなかのアイヌと同化政策の問題を中心に、②「文化運動」とアイヌ：1960年代から1970年代の激しくなったアイヌ文化振興運動を中心に、③「人権」とアイヌ：1980年代から1990年代の国際人権規約と先住民族の問題を中心に、④「若者」とアイヌ：現在のアイヌの若者のアイデンティティと表象をめぐって、である。

本稿はそのうち、①の時代に関わる研究である。1899年（明治32年）に制定された「北海道旧土人保護法」をはじめ、明治時代に施行され始めた同化政策の政治的な成功の裏で、「消された他者」としてのアイヌのアイデンティティは、現代の映像ではどのようにイメージされていたのか。戦後の1950年代、テレビドキュメンタリーでアイヌ問題を初めて取り上げた「コタンの人たち：日本の少数民族」（1959年・NHK）におけるアイヌの表象を分析することで、1950年代日本の社会におけるアイヌと「他者性」について考えたい。

キーワード アイヌ、ドキュメンタリー、他者性、エスニック表

1. 1950年代のテレビドキュメンタリーにおける「他者性」の様相

(1) 二重構造的単一民族のアイロニー

ドキュメンタリーにおけるアイヌと和人、二つの群像の物語は下記のようなイントロから始まっている。

九州の2倍近くの面積を持つ北海道。わずか100年余り前まで、この島はアイヌの天地でした。豊かな産物に恵まれ、人々は自然にそのままの生活を送ってきました。(省略) 現在、アイヌ系と呼ばれる人たちはおよそ1万5千と言われていますが、その大半は混血で、内地人との見分けもほとんどつかないほどです。市街地近くのコタン風景。コタンとはアイヌ語で部落のことですが、見たところその住まいも、生活も、また、ものの考えも、一般の人たちと少しの変わりもありません。アイヌ語もごく一部の老人を除いてはほとんど知りません。部落の子どもたちも、アイヌとは長いひげを生やしたおじいさんのことだとしか思っていないほどで、自分自身でもすっかり日本人になりきっているのです。

アイヌに関連する写真について研究した東村は、「…(省略) 戦後1950年代から70年代前半にかけては、戦前期の同化政策の延長線上で「アイヌの同化政策はほとんど完了した」といった認識が広まっていったのと背中合わせに、「滅びゆく」まえの姿や風俗を記録しようとした出版物は少なくない」と述べている¹。同化政策の「完了」を意味する範疇については深層的な検証が無論必要だろうが、当該時期の事情が窺える東村の言うようなアイヌ民族の和人への同化は政策的には終わったはずだった。

遡ってアイヌに関する研究を辿ってみると、アイヌ呼称の問題は長い歴史のなかで実に大きく変容してきたのが分かる。たとえば、通史的な文化人類学の観点から「アイヌ観」という他者性の認識的変容における政治性を鋭く論じた木名瀬は、アイヌ研究の動向が「人種論」と「文化論」という二つの大きな流れによって進められてきたという²。その木名瀬の論文を少し紹介してみると、氏の「人種論」のなかのアイヌの他者性の背後にある言説とは、「滅びる」＝「古民」というもので、古民とは単に滅びていく民族という言説ではなく、実は「彼らに『歴史』を認めないものであり、したがって逆説的に『永遠』に彼らを『古民』として固定していく」狙いがあったという。また木名瀬は「文化人類学」のなかでのアイヌへのまなざしについては、同化と「差異」をめぐる政治的な企みの変容として通史的に概観しており、①戦時下においては「差異を差異として動員していくシステム化」を行い、「未開なアイヌがいかにか同化の達成に成功したのかを称揚するため」に利用されたり、かえってアイヌの他者性を強調して和人との乖離を進行させたりしたことや、②アイヌ語とアイヌ文学における「他者性」に関しては、当時の代表的なアイヌ語の研究者である金田一の業績は「過剰に美学化」され、「純粹で美しい『未開人』、すなわち『高貴な野蛮人』としてアイヌ像を完成している」ことで、秘められているのは「支配しつつ『愛撫』するという政治的な『飼育』であった」と論じている。③なお、金田一の後援者である柳田はアイヌへの政策について「愛撫と保護」を支持し³、実際にアイヌ文化の保護は「日常的なコンテクストのなかの文化ではなく、記録された『文芸』に象徴される脱身体化・脱コンテクスト化された文化であった」という。④なお、「国民国家の支配技術の一つとして、伝統文芸の「フォーマット化」が支持されるなか、結果的にアイヌ文化は「周辺文化」として非日常化され国民文化の下位に位置する「内なる他者」の概念として把握されることとなり、その影響は本質的な文化の前では単なるノイズとして隠蔽し続けることが可能となった」と述べている。つまり木名瀬のいうアイヌの同化史観のなかの「他者性」の言説とは「国民を創出する過程でアイヌの差異を永続的に対象化するレトリックの暴力的なプロセス」であったといえよう。

一方、アイヌの呼称の問題を和人との関係のなかから新しく接近している東村は、いわゆる「ウタリ」と「アイヌ」という名称における言説的な表象の差異への関心をきっかけに、戦後アイヌの呼称の変容について論文を

¹東村岳史(2010)「アイヌの写真を撮る/見るまなざし:1950年代~70年代前半の写真雑誌と掛川源一郎」『国際開発研究フォーラム』39.

²木名瀬高嗣(1997)「表象と政治性:アイヌをめぐる文化人類学的言説に関する素描」『民族学研究』.

³同上、8頁.

まとめた⁴。実際、「アイヌ」に関する呼称は「ウタリ」の他、「旧土人」、「アイヌ系」、「アイヌ民族」などがあり、それは日本人（和人・シャモ）との関係性の相互作用的な変化によって生じてきたと述べている。東村によると、「旧土人」という呼称は、1878年にアイヌに対する戸籍上の呼称として統一すべく通達して以後、北海道旧土人保護法に続き、正式に使用されてきたという。その旧土人の「土人」は「未開人種」を含意する普通名詞であり、アイヌという呼称は、カテゴリー化からさらに「スティグマ化」されるため、土人＝アイヌ＝未開というスティグマを避けるため「アイヌ」から逃れようとする人が出現したと述べている。その後、1930年代ごろ北海道旧土人保護法の第二次改正が議論となり和人が「ウタリ」や同族という語を使い始めた。戦後になって「アイヌ系」という呼称が知里真志保によって使われ始めたと言われており、1960年北海道アイヌ協会が「ウタリ協会」に名称変更するに至る。そして、1990年代に入ると「アイヌ民族」という政治的意思が強く込められた呼称の例が増加してきたと記している。

そのようなアイヌへの法律の制定（1899年）とアイヌ呼称に関する政治的な動きの変化は、近代日本の成立の言説と重要な関係性を持っていた。たとえば、吉野は「日本人としてのアイデンティティが日本列島に住む大部分の人々に広まったのは明治中期で、『近代的なナショナリズム』と呼べるような集合意識が成立するのは1895年前後（日清戦争期）と推測される」と提示しており、アイヌへの初の法律の適用である「北海道旧土人保護法」の制定とも時期的に重なっているのが分かる⁵。その問題に関しては事後詳細な概念的な検討が必要となろうが、明治30年前後の日本は「エスニック」アイデンティティと「ネーション」のアイデンティティの単一化を企んでおり、そのためにも「アイヌ」というエスニック・アイデンティティは「もう一つの日本人」としての他者とさせる必要があったのであろう。

以上アイヌの呼称が意味する「他者性」の政治的な言説の変化に関する重要な論議を簡略的に検討した。

『日本の素顔』「コタンの人たち：日本の少数民族」に登場する1950年代のアイヌの人たちは、自らが「日本人」としてラベリングされるのを望んでおり、「未開人」というアイヌのカテゴリー化から抜け出すために、自分のアイデンティティを必死に殺しながら生きている「人たち」としてイメージされていた。

しかしながら、それは一つの民族としての「日本人」ではなく、「隠れた他者」を隠蔽した「二重構造的な単一民族」というアイロニーの状況を暗示する「日本人」であったと考える。ドキュメンタリー的ななかで表象されている1950年代の日本の社会におけるアイヌの「他者性」は、言葉や伝統、文化としても、そして人種としても、アイヌの本質的なアイデンティティの忘却を強いられている過去の社会的な圧力が暗黙的に継続して働いていた。またその後、1970年代のアイヌ文化振興運動や、1980～1990年代の人権と先住民に関連する社会的な変動のウネリを予想もできず、不慣れた日本人のアイデンティティを真似しながら生きることこそがアイヌのアイデンティティだと考えていた人も少数ではなかったことを物語っていたのである。

(2) アイデンティティの剥製化：観光とアイヌ

次に、『日本の素顔』「コタンの人たち：日本の少数民族」における「他者性」の特徴として、「観光」と「剥製化」されるアイヌのアイデンティティのことが挙げられる。東村によると、「1936年に創設された札幌観光協会が戦時中にも解散することなく活動を継続させていたのをはじめとして、戦後になると自治体も観光組織を立ち上げて観光客の誘致に乗出すようになる」と述べている⁶。そして、氏は、「…（省略）粗製濫造気味のお祭りブ

⁴東村岳史（2007）「呼称から考える「アイヌ民族」と「日本人」の関係」『国際開発研究フォーラム』34。

⁵吉野耕作（1997）『文化ナショナリズムの社会学：現代日本のアイデンティティの行方』名古屋大学出版会、1997、38頁。

⁶東村岳史（2000）、39頁。

ームに観光会を始め道民から批判の声がボツボツ聞こえている」という北海道新聞の記事（1959.9.7付、「多すぎるお祭り」）を紹介している。偶然だろうか、本研究対象であるドキュメンタリー「コタンの人たち：日本の少数民族」はほぼ同時期に制作された（1959年8月30放送）もので、番組のなかの「観光」とアイヌの表象は当該期の皮肉な観光事情が表象されていた。

夏は北海道へ、異国情緒あふれたアイヌのふるさとへ。こうして、今年もぐっと押しかけた観光客。好奇心の目を光らした観光客を乗せて、馬車はアイヌ部落へ入ります。酋長の店、酋長の家という看板がいたるところ目に付くこの界限。売り子の娘さんも近代女性です。客が来るや、あわてて女の子(めのこ)に早変わりします。サンダルをつっかけ、無遠慮な客の目にさらされながら、無表情に立つ老人。(中略)その後は、記念撮影です。この人たちは、アイヌらしくいわば演技することで生活をしているのです。もはや、一見してアイヌと分かる服装をした人たちは、こうした場所で、こういう形でしか見られません。1回のモデル料30円也。こんな張り紙が部落のほうぼうに貼られています。見られ、写されるために座るおばあさん。北海道の温泉場、阿寒湖畔。この辺りも年々土産物屋が増える一方で、中には内地人の経営するアイヌの店までできる始末です。

以上に書かれたように、観光客を相手に「行為」するアイヌと「演技」する和人の世界は、いわゆる「同化言説」⁷においては主（和人）対客（アイヌ）が変わる「ホスト」と「ゲスト」の逆転の場でありながら、なお、アイヌ文化の「剥製化」が進行する場でもあったといえよう。

一方で、太田は文化の担い手が自ら文化を客体化するプロセスのなかで、自己のアイデンティティがどう形成されるのかについて分析しており、その文化の客体化を促す社会的要因の一つとして「観光」を取り上げている。氏は、文化を客体化する観光をとおしてマイノリティや、未開社会、民俗文化のアイデンティティを創造することが可能であると論じていた⁸。論文のなかではその事例の一つとして北海道沙流郡平取町二風谷におけるアイヌ観光が紹介されており、「見る側」対「見られる側」の図式を、単に「文化の見世物化」という否定的な見解ではなく、文化の「消費」対「創造」というアンビバレントな他者性から、文化とアイデンティティの真髄を問おうとしたのである。

しかしながら、太田の見解は、「文化の担い手の『創造』的な『主体性』に着目することが比較的容易なコンテキストとして『観光』を取り上げるという傾向は、ややもすると現実的な『政治』を迂回するための『狡知』に墮す危険をはらんでいる可能性がある」と、観光化において「誰が文化の主体となるのか」という疑問を投げかけながら強く批判される場面もあった⁹。

また、番組のなかの言説から検討してみると、当該期のイメージされた現実的な問題は太田の言う文化のアイデンティティを創造のプロセスとは程遠い状況を物語っていたのである。大雑把な観光ブームと商業化の加熱につれて浮き彫りとなったのは、文化とアイデンティティの「創造」ではなく、商業性に目がくらんだアイヌ文化の「歪曲」であった。例えばその一つの事例として番組に登場したのは、アイヌ文化ではない「やらせ」の競技の頭相撲の紹介のシーンである。

全国各地で売られている観光絵はがき。もちろん、コタンの人たちはことさら古い風俗、異なった民族のように紹介されることを好ましく思っていないが、さらにこの人たちの憤激させているのはアイヌの古い風習を歪めた写真の多いことです。頭相撲。こんな競技は昔からコタンの中にはありません。見世物としてわざとやらせたものです。(中略)地元の観光協会や商店会の後援による観光宣伝のための熊祭。かつて、このイオマンテは獲物の授かりを神に祈る狩猟民族の願いのこもった厳粛な祭でした。しかし、今は地元の業者から資金を仰ぎ、ショーのような形でしか続けられません。このおばあさんたちもいくらかの日当て集まってきました。

⁷東村岳史(2002)「戦後におけるアイヌの熊祭り：1940年代後半～1960年代後半の新聞記事分析を中心に」解放社会学研究 14.

⁸大田好信(1993)「文化の客体化：観光をとおした文化とアイデンティティの創造」『民族学研究』57.

⁹木名瀬(1997) 12-13頁.

要するにドキュメンタリーで表象された1950年代のアイヌのもう一つの他者性は、「見世物」としての他者であり、また「作られた」他者であり、アイヌの本質的な中身は失われつつ歪曲された形だけが踊る「剥製化」されたアイヌであったと言っても過言ではないのではなからうか。

ドキュメンタリーの表象において、北海道のアイヌ部落の観光には、「創造された伝統」が「…現在に生きる人間の過去との連続性を確保するとともに、他者には無い自らの伝統の所有を強調するので他者に対する差異感の源泉となり、民俗のアイデンティティを維持、強化する」¹⁰という意味の文化アイデンティティへの意志はなぜか丸ごと放り出されていた。1950～1960年代の北海道観光ブームのなかで登場するアイヌ部落の観光地には、アイヌを売り込む「アイヌ」とアイヌを演技する「和人」といったパフォーマンスの商業性と「疑似アイヌ」の和人の存在がイメージされており、民族アイデンティティと文化アイデンティティの混淆と現代社会における文化ナショナリズムの脆さを喚起させていたのである¹¹。

(3) コンテキストされる三つの表象の桎梏：構築されるステレオタイプのアイヌ表象

第三に、「他者性」の特徴として考えられるのはアイヌを代表する三つ巴の表象の構築である。つまり、当時の番組に登場する知里真志保（アイヌ言語学者）、萱野茂（アイヌ伝統継承者）、貝澤正（アイヌ農業指導者）といった三人は、その後実質的にはアイヌのリーダー的な存在となるが、このような三つの家系によるアイヌに関わる固定的な表象の枠はその時作られており、その後もずっと受け継がれ実際60年間、番組の花形となっていた。

番組で三人のなかで先に登場するのは知里真志保である。当時は北海道大学の教授となっていた知里は、アイヌ語とアイヌ文学の研究者として、当時のアイヌの他者性について次のように述べている。

「実はね、アイヌっていうのはもう民族としては日本人なんです。ただ、問題はですね、アイヌだという意識が日本人の中にもアイヌの中にも残ってるんじゃないんですかね。で、その意識が日本人にとっては変な優越感になってる、ね。アイヌにとっては劣等感になったりね、そういう状態があるんじゃないかと思います。(中略)そして日本人らしい日本人になりたいという気持ちを持ってんじゃないんですかね。僕たち学者としてはですね、(音声不明瞭)文化を一生懸命探っておりますけれども、滅びる前にそれを記録するけれども、滅びてしまったら仕方ないと思いますね。

その見解は、日本では高等教育を受けて人が羨む社会的な地位にまで登ったにもかかわらず、自分のアイデンティティと日本社会との葛藤にずっと悩んだ知里であったからこそ可能な、同時期のアイヌの「他者性」の表象については的確な分析ではなからうか。また上記の言説からは、アイヌとして自分のやるべき仕事への信念が覗けており、知里が亡くなるまでのアイヌ研究への貢献を想起させているのである。

二人目の貝澤正の場合、その家系は、1950年代以後2000年代の現在に至るまで日本のアイヌ関連ドキュメンタリーにおいて実に4代にわたって取り上げられており、まさに日本のテレビドキュメンタリーの歴史においてアイヌを代表するコンテキスト化された「アイヌ」表象そのものとなったのである。

貝澤さんは若い頃はなかなかの熱血児で、青年時代、開拓農民として満州に渡りました。生きがたい環境にある同族たちのために新天地に新しいコタンを作ろうというのが当時の意気込みでした。敗戦のためこの夢も破れましたが、今は貝澤さんはこの地方の農業経営の指導者です。

三人目の、おそらくアイヌのなかで最も日本中に知られていた人の一人であろう萱野茂も、当時は悩むアイヌ青年としてドキュメンタリーに登場していた。

萱野茂さんも村づくりの仲間の一人です。萱野さんは数年前まではコタンの青年たちが一度は悩むようにアイヌ系の出身である

¹⁰吉野（1997）、44-45頁。

¹¹各概念については吉野（1997）の見解を参考とした。

ことをたまたま思っただけです。しかし、調査に訪れた学者の影響からようやく最近アイヌのことに愛着を持ち、自分でも伝統の木彫り細工を副業にしています。余裕があれば老人を招き、いろいろ昔のことを聞くのが萱野さんの楽しみです。コタンの老人と青年との話はいつまでも弾みます。

そして、上記のように当時の番組で紹介されていた萱野が楽しくやっていた「コタンの老人からの聞き取り」は、その後「録音」され、「記録」されることで、やがてアイヌ文化の復権と保存に大きく貢献することに繋がるのである。それは、「滅びていく」民族文化と「消されていた」民族の歴史が再び公共の記憶のなかに取り戻される瞬間であったといえる。

以上、1950年代のドキュメンタリーに登場した三人のアイヌを紹介したが、その後アイヌ関連のドキュメンタリーには「常連」となっており、その三人の生き様は、まさにアイヌの標本のようにアイヌ民族の象徴的なイメージとしてコンテクスト化される結果となる。そのような結果になった理由としては、そもそもその三人自身がアイヌのために偉大な業績を果たしてきた個人の功労から取材の対象となったこともあろうが、裏の事情としては、テレビ画面に出演して自分が「アイヌ」であることを世にさらけ出すアイヌはまだ少なく、アイヌを取材する側の厳しい状況があったからだろうと十分に推測できる。こういった諸々の事実から、ステレオタイプなアイヌの表象はより固定化され、アイヌ表象として強くコンテクストされ、想像力を失った表象は斜陽化していく。実際、2000年代になるとアイヌ関連ドキュメンタリーの制作本数はNHK、民放を問わず極めて少なくなっている。いずれにせよ、ではそのようにステレオタイプとなっていくアイヌ表象のなか、アイヌ自らが「アイヌと言えない」という社会的な状況とは一体どんなことだったのかを、次の最後の「他者性」の特徴で振り返ってみたいと思う。

(4) 「神の声」¹²と状況的暴力性

最後に、番組における「他者性」の特徴として考えられるのは、「神の声（ナレーション）」による解説的表現で物語が完結しており、しかしその解説は皮肉にも「同化の失敗」を強調し、当時の状況的暴力性を推考させる結果となっていた。テレビ草創期のドキュメンタリーの一般的な形式と同じく当時の番組では始終「神の声」によってストーリーが展開されている。その番組のイントロと終わりの「神の声」は、「日本人になりたいアイヌ」に統一されている。例えば、次のとおりである。

●**イントロ** …コタンとはアイヌ語で部落のことですが、見たところその住まいも、生活も、また、ものの考えも、一般の人たちと少しの変わりもありません。アイヌ語もごく一部の老人を除いてはほとんど知りません。部落の子どもたちも、アイヌとは長いひげを生やしたおじいさんのことだとしか思っていないほどで、自分自身でもすっかり日本人になりきっているのです。

●**終わり** …偏見と闘いながら土に取り組む農民たち。過去のことは離れ、日本人として幸せに生き抜きたい。これが全てのコタンの人たちの願いなのです。

要するに、子どものアイヌは日本人にほぼ「同化」されていて、大人のアイヌにとってみれば「同化」が最高のアイヌの「幸せ」であるという解説である。そのような言説が成立する理由については、またドキュメンタリーのナレーションから探せる。

①全国各地で売られている観光絵はがき。もちろん、コタンの人たちはことさら古い風俗、異なった民族のように紹介されることを好ましく思っていないが、さらにこの人たちを憤激させているのはアイヌの古い風習を歪めた写真の多いことです。②口の周りの入れ墨を隠すようにして歩くおばあさん。若い方の女の人は、長い袖で

¹² Nichols は、初期のドキュメンタリーの表現手法を解説的モード (expository mode) と分類し、そのモードのなかのナレーターの声を「神の声 : voice of God」と称した (Bill Nichols, *Representing Reality*, Indiana university press, 1991) .

二の腕を覆い、コタンの人たちであることが目立たないようにしています。こんな風景は街で時折見かけるところです。和人と接触して以来、アイヌの辿ってきた歴史がこの人たちをそうした気持ちにさせているのです。③若い人たちの悩みは結婚です。ほとんどの人たちが和人と家庭を持つことを願っていますが、和人側では必ずしもその願いを受け入れてくれません。遠い地方ではそれほどでもありませんが、コタンの近くであればあるほど、この人たちへの偏見はまだ根強く残っています。この偏見から逃れるため、故郷を離れたくても生活の問題がそれを許しません。こうしたことが重なり合い、若い人たちをあてのまない気持ちに追いやるのです。

つまり、アイヌにとって「幸せ」を確保するためには、仕方なく「同化」することの他に術のない状況であったからだ。そこには、「アイヌ」と名乗ることを許さないという認知基準があった同化政策はもとより、アイヌへの差別と偏見に苦しめられ、アイヌから逃れようと、自主的にアイデンティティを忘却（放棄）しようとする「他者性」が表象されていたのである。上記のナレーションを読むと、特に①は、差異を強調することで「他者」としてのアイヌを固着させる差別を、②はアイヌ文化を「未開」のものとして政策的にスティグマ化された差別を、③は「同化」の根本的な問題であろう結婚＝混血における差別に言及しており、当時のアイヌに対する日本社会における日常的な偏見と差別の実態が非常に鋭く表象されていたのが分かる。

以上の検討から一つの回答が見えてくる。要するに、「神の声」が言いたかったのは、実は、「同化願望」のアイヌではなく、1950年代を生きる日本社会に「同化」の真正性への疑問を投げ掛けていたのではなからうか。「神の声」は、同化政策の施行以来60年、アイヌのアイデンティティが剥製され、消去され、忘却される同化は卑劣な差別と偏見の表象そのもの以外何ものでもなく、同化政策は「失敗」であったことを再度強調したかったのだと思える。

2. おわりに

本稿は1950年代のテレビドキュメンタリーにおけるアイヌの表象を分析することで、日本社会におけるアイヌの「他者性」についての特徴を探ってみたものである。その研究対象として本稿で取り上げた『日本の素顔』「コタンの人たち：日本の少数民族」は、繰り返しになるが、1959年に制作された番組であり、本格的にアイヌを素材とした初のドキュメンタリーであった。本文で検討したように1950年代の代表的なドキュメンタリーにおけるアイヌの他者性は概ね四つの特徴が挙げられる。それは、①アイヌの呼称をめぐる議論の余地を未だに解決できず残された二重構造的な「日本人」の単一民族のアイロニー、②北海道観光ブームのなかでの商業的な歪曲と剥製されるパフォーマンスの乱立のことでますます疲弊していくアイヌ文化とアイヌ民族、③メディアに取り上げられることで結局はステレオタイプなイメージに固着する始末となったアイヌとアイヌ文化、④和人の差別と偏見を正当化するために狡猾な「同化言説」の呪縛を強いられたアイヌの表象であった。

バーバ (Homi K. Bhabha *The Location of Culture* (1994)『文化の場所：ポストコロニアリズムの位相』、本橋哲也他訳、法政大学出版局、2005.)のいうとおり、一般的に「他者」を称する際、アンビバレントな「他者」の意味を持っており、その時の「他者性」も変わりはない。しかしながら、日本の放送で再現されたドキュメンタリーのなかにおいての「他者」は、長年「他者」として決めつけられたアイヌであり、翻弄されてきた「差別のアイデンティティ」の他者性にほかならない。1950年代のアイヌの「他者性」はそう物語っていたのである。

謝辞：本研究はNHKアーカイブス学術利用トライアル研究の支援を得て行われた研究成果の一部である。記して感謝の意を表す。